

## 編集後記

ここに東アジア世界史研究センターの『年報』第3号をお届けする。

オープン・リサーチ・センター整備事業として、私たちのプロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」が採択されて3年目の半ばである。年度の半ばで『年報』を刊行することになったのは、今年度に『年報』を2号刊行することにしたからである。それは本センターが、その研究成果を公開する柱として設定した公開講座・シンポジウムに加えて、新たに初年度に設定した研究会が、これまで3回にわたって開催されたのであるが、それによって研究成果が着実に蓄積され、その研究会の成果を広く公開しようとするに到ったためである。

本研究会の第1回（08/02/16開催）は、本センターの研究方法やその方針を確定するために、具体的にもたらされた文物への検討方法、留学生の果たした役割、さらに東アジア世界史の知見を拓げるために朝鮮半島からの留学生研究の現段階についての報告と討論とを行なった。その成果は、ホームページ上に公開を開始した「古代東アジア世界史年表」作成にとって有益なものとなった。第2回研究会（09/02/07開催）は、人・物・情報の具体的な移動・交流の意味するものと、政治史として対日外交政策、対外貿易などについての若手研究者による報告会として開催された。この回は、前回にも増して、若手研究者の率直な情報交換の場として機能した。そして今年度前半に開催された第3回研究会（09/07/25）は、唐代の墓誌や官文書の書式から井真成の身分への再検討を通して井真成研究に新たな光をあてた報告、さらに東アジア世界の国際関係の性格を擬制的親族関係から論じた報告を得て、活発な討論が展開された。ここでは、これまでの井真成研究のあり方についての再検討の必要性や、東アジア世界史の有効性を考察するための視点について議論され、それらはいずれも、本センターが解明を目指す研究の柱に対して刺激的で有用な提言となった。本『年報』は、この3回の研究会のうち、第2回と第3回の報告を中心に構成したものである。ここにあらためて、報告者ならびに参加者に感謝申し上げたい。

この研究会は、また本センターを東アジア世界史に関する研究拠点の一つとして内外の研究者間の情報交換の場とすべく新設されたものでもあるが、これまでの3回の研究会は、いずれも本センターの期待と予想を上回る意見交換や研究者間の交流が実現できた。今後も研究情報の集積、内外の研究者の交流の場を提供すべく努力したいと考えている。それらを本センターにおける研究の活性化や、公開講座・シンポジウムのテーマ設定や論議への活用へと結びつけたいと願っている。そしてそれを『年報』やホームページ上などで広く公開し、より多くの研究者や市民に議論の輪を拓げていきたいと望んでいる。

今後もこの『年報』や、この研究プロジェクトに対して、忌憚のないご批判をお寄せいただければ幸いである。今年度後半には、第3回シンポジウムや第4回研究会の開催が予定されている。また今年度末には、このシンポジウムと本年7月に開催した第3回公開講座の報告を中心とした『年報』第4号の刊行を予定している。

本センターのこれら研究活動に、さらなるご協力をお願いいたします。

（飯尾秀幸）